



2011年2月9日放送

漢方頻用処方解説 桂枝茯苓丸①

大阪大学大学院医学研究科 漢方医学寄附講座 准教授

(現 日本赤十字社和歌山医療センター 心療内科部長) **西田慎二**

1. 主な効能

桂枝茯苓丸のおもな効能は、子宮並びにその付属器の炎症、子宮内膜症、月経不順、月経困難、帯下、頭痛・めまい・のぼせ・肩こりなどの更年期障害、冷え症、腹膜炎、打撲傷、痔疾患、睾丸炎などです。瘀血証の治療の基本処方として、産婦人科領域はもちろん、その他の内臓疾患、筋骨格系疾患、皮膚疾患、精神疾患など非常に幅広い領域に渡ります。

また、桂枝茯苓丸加薏苡仁は、月経不順、血の道症、にきび、しみ、手足のあれなどが適応となっています。

2. 処方の出典と処方名の由来

桂枝茯苓丸の原典は『金匱要略』の「婦人妊娠病篇」です。そこには「婦人宿より癥病あり、経断ちて未だ三月に及ばずして漏下を得て止まず、胎動が臍上に在る者は、癥瘕の害となす。六月にして動く者は、前三月に経水利する時は胎なり。血下る者、後断つも三月なるは舛なり。血止まらざる所以は、その癥去らざるが故なり。まさにその癥を下すべし、桂枝茯苓丸これを主る」とあります。

これは「女性で以前から癥病があり、月経が停止して3ヵ月に満たないうちに性器出血が生じて止まらず、臍の上で胎動のように感じるのは、妊娠ではなく実は癥瘕の病である。月経が止まって6ヵ月で胎動があり、月経停止3ヵ月前の月経が正常に来ている場合は妊娠であるが、月経停止前3ヵ月の月経が不順で異常出血があり、3ヵ月にわたって月経がないのは瘵である。出血が止まらないのは癥があるからであって、その癥を下す必要がある、桂枝茯苓丸がこれを主る」という意味です。「癥病」あるいは「癥瘕」とは腹腔内腫瘍、つまり子宮筋腫や内膜症、卵巣腫瘍などと考えられ、これがあるために不整出血や月経不順が生じている、これを治すためには桂枝茯苓丸である、というものです。

処方名についてはもちろん構成生薬から作られています。丸剤ですので、蜜で丸めたものが本来の形ですが、現在使用されるのはおもに桂枝茯苓丸料、つまり煎じ薬のエキス製剤でしょう。なお、桂枝茯苓丸加薏苡仁は、原南陽の経験方です。

3. 生薬構成の漢方的解説(薬能)

桂枝茯苓丸の構成ですが、桂皮・茯苓・牡丹皮・桃仁・芍薬からなります。漢方医学的な薬能では、桃仁は強力な活血化瘀作用と潤腸通便作用があります。牡丹皮は活血化瘀作用と清熱涼血作用があります。芍薬は鎮痛止痙作用があります。なお、中国では芍薬は白芍と赤芍に分けて使われますが、桂枝茯苓丸では赤芍が用いられ、これは活血化瘀作用があるとされます。桂皮は陽気を巡らせることで冷えやのぼせを改善します。茯苓は水滯を改善させます。

処方全体をみると、瘀血の改善を中心として、気逆や水毒にも対応するといった働きがあり、瘀血証に対する標準的な治療薬であるといえます。

なお、牡丹皮や桃仁には子宮収縮作用があるとされ、妊娠中の患者には投与しないことが望ましいとされています。実際、桂枝茯苓丸は別名「奪命丸」として早産の途中で胎児死亡により母体が重篤な状態に陥ったときに投与されたり、また別名「催生湯」として分娩の遅れている妊婦に対して、分娩促進目的で使用されたりすることもあります。

さらに、桂枝茯苓丸加薏苡仁の薏苡仁は、利尿作用、排膿作用がありますが、特に日本ではイボの薬として使用されてきた経緯があります。よって桂枝茯苓丸加薏苡仁は桂枝茯苓丸に肌荒れやイボ、また水腫が加わった状態に使用されます。

4. 古医書における記載の紹介

桂枝茯苓丸について、有持桂里は『校正方輿輓』で、「この方、産前においては生を催し、生後にありては悪露停滞、心腹疼痛、あるいは発熱増寒をなす者を治す」と述べています。

また、尾台榕堂は『類聚方広義』で、「経水整わず、時々頭痛し、腹中拘攣し、あるいは手足痺するものを治す。あるいは経期の至るごとに、頭重眩暈し、腹中腰脚の疼痛する者、産後すでに数十日を過ぎて他に異常なく、時々臍をめぐって刺痛し、あるいはその痛みが腰脚に延びる者、また閉経して、上衝し、頭痛し、眼中に翳を生じ、赤脈は縦横に、

疼痛して羞明し、腹中拘攣する者、また妊娠して顛倒し、子、腹中にて死し、下血やまず、小腹攣痛する者に、これを用いて胎すなわち下す。また血淋腸風下血に撰用して皆効あり。以上の諸症に大黄を加えて煎服すれば佳となす」と述べています。月経不順、月経困難症、更年期障害、死産などの産婦人科疾患のみならず、血尿や下血などにも効果があるということでした。

そして、浅田宗伯は『勿誤藥室方函口訣』で、「この方は瘀血より来たる癥瘕を去るが方意にて、すべて瘀血より生ずる諸症に活用すべし。原南陽は甘草・大黄を加えて腸癰を治すという。余が門にては大黄・附子を加えて血瀝痛及び打撲疼痛を治し、車前子、茅根を加へて血分腫及び産後の水気を治するなり。またこの方と桃核承気湯との別は、桃核承気湯は狂のごとくで小腹急結がある、桂枝茯苓丸は癥が去らないゆえの病を治すということである。また温経湯のように上熱下寒の症候が無い」と述べています。瘀血による諸症には、広く用いてよいこと、また桃核承気湯や温経湯との鑑別が説明されています。

さらに、湯本求真は『皇漢医学』で、「本方中には芍薬を含むにより、その証として直腹筋の攣急あるは無論なれども、この証における攣急は穀水二毒によるものと異なり、主として血毒によるものなれば、左直腹筋のみ攣急し右は全く攣急せざるか、仮にこれがあるも左側に比すれば弱度なるを常とする。また桃仁、牡丹皮を有するが故に臍直下に癥すなわち血塞ぐを触知し得るものなれども、大黄牡丹皮湯の小腹腫痞、抵挡湯の小腹硬満のごとき高度なるにあらずして、比較的軟弱なる凝塊を呈し按ずれば微痛するに止まる。また桂枝、茯苓あるをもって苓桂朮甘湯証におけるがごとく上衝、眩暈、心下悸を発することなきにあざれども彼が必ず水毒を伴い右直腹筋に沿って上衝し胃内停水を齎すと異なり、必ず左直腹筋によりて上衝し胃内停水を来すことなし。」

故に病者もし上衝、心悸、心下悸などを訴えてその左直腹筋を横経に按じて攣急疼痛を認め、かつ臍下部に軟弱なる凝塊を触知すると共に厭痛を診し得れば男女老少を問わずこれをもって本方の腹証となすべし」と述べています。

桂枝茯苓丸の腹証として、左直腹筋の攣急と、臍下部の比較的軟弱な凝塊があること、また上衝・眩暈など苓桂朮甘湯に似た症状があっても胃内停水の無いこと、右直腹筋の緊張が無いことが鑑別点であることと説明されています。